

かがやき

vol. 35

平成27年度

1号

医療ビッグデータ時代の到来



副院長
安藤 昭彦

■ デジタルデータと私たちの生活

ビッグデータという言葉をご存じでしょうか。身近なところでは、スマホを使ったSNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）でのプロフィール・コメントなどの情報やAmazon、楽天などオンライン通販で登録された顧客データなど、ICT（情報通信技術）の飛躍的な進歩で多種多様、膨大なデータが世界中を飛び交っています。総務省のホームページによれば、その量は2011年の約2ゼタバイト（2兆ギガバイト）から2016年には約8ゼタバイトと雪だるま式に（ずいぶんとスケールの違う例えですが…）増えていくと予想されています。

こういうものは一切やらないから自分は関係ないと思われるかもしれませんが、“Suica”を使って電車に乗るだけで知らないうちにどこからどこまで移動したのかデータが収集され販売されていたことが発覚し問題となったのは比較的最近のことです。今や私たちはデジタルデータと無縁の生活を送ることはできません。現に、この秋には私たち一人一人に12ケタの番号が割り当てられ、来年1月からは社会保障や税、災害対策にマイナンバー制度が導入されます。いずれこのマイナンバーがあらゆる分野においてビッグデータをより有効に活用するため必要不可欠になると予想されています。

■ 医療分野でのビッグデータの集積と活用

医療の分野でもビッグデータの集積と活用が始まっています。その一つはDPCデータです。DPC制度とは診断群分類毎に入院医療費を一定額支払っていただく仕組みを指します。主に当院のような急性期病院が対象で、診療データの提出が義務付けられています。もう一つは、オンライン請求となったレセプト（診療報酬明細）データです。年間18億件ものデータがNational Data Baseとして蓄積されています。

これらのビッグデータを活用することで日本の医療の現状をほぼ把握することが可能になってきたといわれています。例えばある地域における脳卒中の患者さんがどの地域の病院で治療を受けているのか、急性期治療を終えた段階で何割位の患者さんが今度はどこに移動してリハビリを受けているのかなどを目に見える形で表すことが出来ます。これによってある地域に足りない医療は何か、逆に余っている医療は何かが明確になってきます。まさに医療ビッグデータ時代の到来です。

今我が国では超高齢化社会にふさわしい医療・介護提供体制、すなわち住み慣れた地域で元気に暮らせる地域包括ケアシステムを支えるため、地域医療構想（ビジョン）の策定に取り組んでいます。医療ビッグデータから得られた結果をもとに、その地域にふさわしいバランスのとれた医療機能の分化と連携を適切に推進することが各医療機関に求められています。

さいたま赤十字病院の役割は、重症な患者さんを中心に診療を行う高度急性期病院としての機能を果たすことです。皆様にはこのことを何卒ご理解いただき、まずは近くの“かかりつけ医”を受診し、専門的な治療が必要な場合に当院を利用していただくようお願いいたします。

部長就任のごあいさつ

小児科部長 佐藤 有子



2015年4月より小児科部長を拝命いたしました。当院小児科は2012年に常勤医が不在となり、その後埼玉県立小児医療センターなどの医療機関からの協力を得ながら診療を行ってまいりました。2014年4月に当院で初期研修を行った経験のある小児科医1名が常勤医として勤務を開始したところ、同年7月自治医科大学附属さいたま医療センター小児科からの派遣で勤務することになりました。

小児科医には病気の子供を診察すること以外に、子供が健やかな生活を送ることができるよう支援をしていく使命があります。少子化といわれている現在、なおさら子供とその家族が安心して生活ができるような環境を整えることが重要です。

子供は急性疾患がほとんどのため、遠方の医療機関への受診がほぼ不可能です。さらに最近では予防接種の種類も増加しており、家族の負担を考えると近隣の医療機関への受診が望ましいと言えます。残念ながら埼玉県は全体的に医師の充足率

がよいとはいえない状況にあります。そんな中で小児科常勤医不在という状況は、みなさまに多大なご迷惑とご心配をおかけしたのではないかと考えています。

現在外来では感染症（呼吸器および消化器感染症全般）・アレルギー疾患（気管支喘息、食物アレルギー、アトピー性皮膚炎）・不登校（不定愁訴など）・予防接種（基礎疾患のある児）・育児相談などを中心とした診療を行っております。入院に関しては病棟の体制を整えている最中で、まだまだみなさまのご要望すべてにおこたえすることが不可能な状況です。2016年の新病院移転時には入院病棟の再開ができるようスタッフ一丸となって準備をすすめております。それまでは微力ではありますが、近隣のみなさまのお役にたてるよう日々研鑽をつみ、真摯に診療に取り組んでいきたいと考えております。今後もみなさまのあたたかいご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



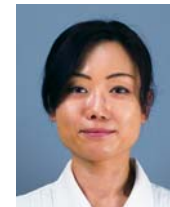
Saitama Red Cross Hospital

認定看護師

認知症看護認定看護師の紹介

認知症があっても患者さん・ご家族が安心して治療を受けられるような環境をつくることが目標です。

認知症看護認定看護師 齋藤 由美



認知症とは、大人として自立した生活を送ってこれた方が、アルツハイマー病やレビー小体病、脳血管障害等さまざまな原因によって記憶力や判断力、あるいは見たもの・聞いたことから状況を理解する力が低下した結果、自立した生活が営めなくなった状態のことをいいます。認知症と聞くと「何もわからなくなるのではないかなどといったネガティブなイメージをお持ちになる方もいらっしゃるかもしれません。しかし、国内の認知症高齢者は2025年には700万人を超えるとも言われており、65歳以上の高齢者のうち、5人に1人が認知症になるという計算になるそうです。いまや認知症は「特別なもの」ではなく、誰にとっても「身近なもの」になりつつあります。ですから、1人ひとりが認知症について正しく知ることが求められているように思います。

そのような社会背景から、認知症看護認定看護師という資格ができ、認知症の進行具合に応じた療養生活環境を整えることや、認知症があってもその人らしくいられるためのケア体制をつくること等を役割とし、病院、施設、在宅とさまざまな場で活動をしています。

私は、2010年に資格を取得し、現在神経内科・呼吸器内科の混合病棟に所属しながら認知症看護認定看護師として活動していますが、活動の中で大切にしていることが2つあります。1つ目は、「認知症があるから」と決めつけることなく、認知症があっても生きる「その人」を知ろうとする姿勢を忘れないようにする、ということです。これは、「人」ではなく「認知症」に着目してしまうことになり、ケアを提供する看護師側のひとりよがりの理解や捉え方しかできなくなってしまふためです。2つ目は、「これまでどのように生きてきたか」と同じくらいに「これからどのように生きていきたいか」を大切にしようという気持ちを持つ、ということです。認知症があってもその人らしくいられるように今を支えるということは、これからの人生を支える、ということにも繋がっているからです。

これらとともに、認知症に関する知識や情報の提供を行いながら、当院の看護の質の向上に貢献できるよう努めています。

今後は、組織横断的な活動をより活発にできるようになり、認知症があっても患者さん・ご家族が安心して治療を受けられるような環境をつくることが目標です。

栄養課 コラム

日頃、病院に来られた（入院された）患者さんに対して栄養管理や栄養指導を行う管理栄養士ですが、最近では啓発イベント等で病院の外に出る事も経験するようになってきましたので、ご紹介したいと思います。

第3回世界腎臓デー in さいたま中央

「世界腎臓デー」とは腎臓病の早期発見と治療の重要性を啓発する国際的な取り組みとして、毎年3月の第2木曜日に定められました。世界100カ国以上の国々でさまざまな啓発キャンペーンが開催されています。

さいたま中央のイベントは、平成27年3月7日（土）にイオンモール与野1階リーフコートで行われました。スタッフとして、さいたま市与野医師会、さいたま市から救急救命士、保健師、地域包括支援センターの社会福祉士、当院からは腎臓内科医師、看護師、薬剤師、作業療法士、管理栄養士が参加しました。



さて、我々管理栄養士は「腎臓を守る食生活を考えよう!」という事で、身近な“味噌汁”を使って、塩分について取り上げました。会場ではだしを効かせ

た特製味噌汁を実際に試食していただき、日頃ご家庭で召し上がっている味噌汁と塩気を比べていただきました。1回に100人分ずつ2回試食タイムを設けましたが、多くの方にお集まりいただきました。予想を上回るペースで試食は進み、1回あたりわずか30～40分で終了となりました。

栄養指導では患者さんの状態に合わせて、カロリー、塩分、たんぱく質など様々な説明を行います。実は簡単なようで

最も難しいのが塩分ではないかと感じています。それは、味覚は一人一人異なり、濃い薄い感覚も違うからです。今回は実際に食べていただくことで、その曖昧な感覚を少しは伝えることができたのではないかと思います。

今回のような不特定多数の方が集うショッピングモールのイベントでは、どうしたら興味を持っていただけるだろうか…等、いつも以上に考える良い機会になりました。今後もこ



のようなイベントに積極的に参加していきたいと思っていますので、もしも見かけたら、是非お集まり下さい!

栄養課長 田中 明穂

患者さんの声にお答えします。

ご意見

食事の時は、温かいお茶が飲みたいので、自販機の「温かいお茶」を残しておいてほしい。

お答えします

ご不便をお掛けして申し訳ございません。3病棟4階の自動販売機のことと思われそうですが、「温かいお茶」が売り切れとなっておりました。自動販売機のメーカーに依頼した結果として、「温かいお茶」は通年継続して販売いたします。また、併せて売り切れ・欠品とならないように申し入れてまいります。

ご意見

食事の案内放送があり、少し遅れて食事の台車が来て配膳されてからセッティングされる。食事を始めてから、15分位すると「食べられましたか?」とスタッフの方が聞きに来られる。早すぎるのではないのでしょうか。とても急がされる感じがします。

お答えします

ご指摘を頂き有り難うございます。配膳が遅い上に下膳が早いというご意見に対して、今後、全病棟では、多くのスタッフで効率よく配膳を行い、下膳は、できるだけ配膳し終えてから30分経過してから行うようにしてまいります。

ご意見

枕の「高さ」「固さ」を選べるようにしてくれると助かります。ちょっと私には高くて固かったです。

お答えします

貴重なご意見を頂き有り難うございます。病棟では数件「他の枕はありませんか?」との問い合わせがありますが、当院では一種類のみの用意となっており、枕の交換はできない旨説明させて頂いております。枕の合わない方は、各自ご用意頂くことも可能です。

ご意見

いつもお世話になっております。外来待合室が混んでいる時、座れる所を探すのが大変です。もう少し、待合室のイスを増やして欲しいものです。

お答えします

ご不便をお掛けして申し訳ございません。整形外科・外科・脳外科のエリアの問題と思われそうですが、通路の確保等スペース的に椅子を増設することは難しく思われます。しかし、患者さんにご不便をお掛けする訳にはまいりませんので、混雑ピーク時には、職員が席を詰めていただくよう、他の患者さんに声かけをして協力していただく、あるいは、臨時の椅子を用意するなどをして対応いたします。

ご意見

毎食、食事カードが付いておりますが、カードにカロリーを表示して頂くと良いと思います。常食を食べている方々の中には運動不足で食べる量を制限する人もいますので、数値的目安は大いに参考になるのでは!

お答えします

貴重なご意見を頂き有り難うございます。現在、当院で使用している給食管理ソフトにはそのような機能が備わっておらず、患者さん一人一人に栄養量をお示しすることは困難です。但し、各病棟には一週間分の食種別献立表を配布しており、エネルギーやタンパク質量も掲載しておりますので、こちらをご参照いただければと思います。



さいたま赤十字病院の理念

赤十字の人道・博愛の精神に基づき、信頼される医療をおこないます。

さいたま赤十字病院の基本方針

1. 患者さんの権利を尊重します。
2. 地域との円滑な医療連携に努めます。
3. 医療の質の向上に努め、安全な医療を提供します。
4. 優れた医療人の育成に努めます。
5. 国内及び国外での医療救援活動に積極的に参加します。

患者さんの権利

1. 公平で適切な医療を受ける権利
2. 個人の尊厳が保たれ、人権を尊重される権利
3. プライバシーが守られ、個人情報保護される権利
4. わかりやすい言葉で検査や治療などの説明を受ける権利
5. 自己の決定権が確認され、医療行為を選択する権利
6. 安全・安心な医療を受ける権利
7. 他施設の医師の意見(セカンドオピニオン)を聞く権利
8. 自己の診療記録等の開示を求める権利

患者さんに守っていただく事項

1. 健康に関する情報を医師や看護師等にお知らせください。
2. 医療行為については、納得したうえで指示に従ってお受けください。
3. 病院内ではルールを守り、他の人に迷惑にならないよう行動してください。
4. 診療費の支払い請求を受けた時は、速やかにお支払いください。

発行：さいたま赤十字病院

〒338-8553 埼玉県さいたま市中央区上落合 8-3-33
TEL 048-852-1111 (代表)

編集：広報委員会